印度學佛教學研究第四十八巻第二号　平成十二年三月

宗教的真理観についての研究

――『教行信証』「真仏土巻」を中心としての考察――

中山彰信

前回「宗教的生についての研究」ということで、本願力回向の信心をいただいた衆生の生き方とは如何なるものであるかについて、『教行信証』「証巻」を中心に考察したのであるが、今回は「宗教的真理観」ということで、「真仏土巻」に焦点をあて、親鸞がどのように捉えていたかを考察してみる。

真理ということを考える場合、その理論的・実践的なることを問わず、真理それ自体が普遍性を持つ所に意義がある。しかし、宗教的真理を考える場合、一般的な科学的真理とは様相を同じくするものであろうか。そもそも宗教とは、主体的な個人の〝いのち〟に対する根源的な問いに関係する。故に、一般存在に該当する真理性とは異なるのではないか。人間の存在意義の探求に応えるような真理こそ、宗教的真理ということではないか。

人間探求の視点がどれだけ深く自己自身の存在性を見抜いているか、そして、徹底した自己存在の追求が人間存在に響き続けているかという所に、宗教的真理の根源があるのでないかと思う。故に、宗教的真理とは自己の生活・生命そのものとし、その中に生きることを自己存在の意義とすることのできるものであり、他の何ものにも替えられない自己自身の意義となるものである。従って、人間がそこにおいて自己の存在の全てを納得し、生きることにおいて、自己の生存の意義を見い出し得るような面が真理であると言える。故に、宗教的真理においては、主体的事実において明らかなる所に普遍性を有するものである。

(一)

「真仏土巻」のはじめに「謹按二眞佛土一者、佛者則是不可思議光如來、土者亦是无量光明土也。然則酬二報大悲誓願一故曰二眞報佛土一卽而有レ願、光明壽命之願是也。」と示し、真仏は「不可思議光如来」、真土は「無量光明土」その仏身土が「大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰ふ」のであると示して、第十二願光明無量・第十三願寿命無量の二願の名

をあげている。証果を成立させる根源としての真仏・真土を示そうとされる。又、第十二願『成就文』の最初に、「无量寿仏威神光明、最尊第一」と無量寿仏の光明は諸仏の光明の中で最も偉大で甚深なることを述べ、その後の引文に、阿弥陀仏の光明の徳を述べるに、無量光仏等の十二光（の徳）が示される。その光明は「共有二衆生一、遇二斯光一者、三垢消滅、身意柔軟、歓喜踊躍、善心生焉。若在二三塗勤苦之処一、見二此光明一、皆得二休息一、無二復苦悩一。壽終之後、皆蒙二解脱一。」と述べ、又「炎二照諸无数天下幽冥之處一、……中略……死後莫下不レ得三解二脱憂苦一者上也。」と、光明が「三塗勤苦の処」「幽冥の処」等にまではたらくことを示す。故に、光明の中の極尊であり、最明無極であることを示す。如来の光明のはたらきは、一切の苦悩の衆生に歓喜・解脱等を与え積極的に活動する光明の本質とするところを示している。この光明は、苦悩するものがその光明の中に包み込まれ真の智恵に目覚めることを明されている。このことについては、『一念多念文意』に、「この如来は光明なり、光明は智恵なり、智恵はひかりのかたちなり、智恵またかたちなければ不可思議光仏と申すなり。この如来、十方微塵世界にみちみちたまへるかゆえに無辺光仏と申す、しかれば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。」又、『唯信鈔文意』に、「無碍光仏の御かたちは智恵のひかりにてましますゆえに、この如来の智願海にすすめいれたまふなり。一切諸仏の智恵をあつめてたまへる御かたちなり。光明は智恵なりとしるべしなり。」又、「微塵世界に無碍の智恵光をはなたしめたまふゆへに尽十方無碍光仏と申すひかりの御かたちにて、いろもましまさず、かたちもましまさず、すなわち無明の闇をはらひ、悪業にさへられず、このゆえに無碍光と申すなり。無碍は有情の悪業煩悩にさへられずなり。しかれば阿弥陀仏は光明なり。光明は智恵のかたちなりとしるべし。」と述べ、如来は光明であり、智恵であることを親鸞はしばしば語っている。故に如来の光明は無明を破する智恵のはたらきであり、苦悩の闇も破するものであって、そこにおいて信心の智恵を得しめるはたらきを示す。

次に、『涅槃経』を長く引文される。まず、光明について親鸞は、「光明者名二不羸劣一、不羸劣者名曰二如來一。又光明者名爲二智慧一。」と、真仏土の光明とは、漠然たる光明ではなく「不羸劣」おとろえることのない光明であり、それが如来であり、又智恵であると明されるのである。又、解脱について「解脱者名曰二虚无一。虚无即是解脱、解脱即是如來、如來即是虚无、非作所作。」と、解脱をめぐって絶対無の世界を明し、真の絶対無の世界が解脱であり、如来であると示し、それは「非作の所作なり」と人間の分別を離れ、あるがままにおのずとなされるはたらきで、如来のはたらきであること

を明される。又、如来について「如來者卽是涅槃、涅槃者卽是无盡、无盡者卽是佛性、佛性者卽是決定、決定者卽是阿耨多羅三藐三菩提。」と、涅槃・無尽・仏性・決定・阿耨多羅三藐三菩提と絶対究極の安定を示すものであることを述べられている。さらに、仏性について「佛性无爲、是故爲レ常。虛空者卽是佛性、佛性者卽是如來、如來者卽是无爲、无爲者卽是常、常者卽是法、法者卽是僧、僧卽无爲、无爲者卽是常。……中略……從二般若波羅蜜一出二大涅槃一。猶如二醍醐一。言二醍醐一者喩二於佛性一、佛性者卽是如來。善男子、如レ是義故、說言二如來所有功德、无量邊不可稱計一。」と、第一に仏性の無為常住なることを示し、次に大涅槃の真理が顕示された最高の醍醐で、それが仏性・如来である。その仏性が現実に具体化してはたらいているものこそ如来である。故に、如来の持っておられるあらゆる功徳は、はかることができないほど多く、無限に広がっているのであって、思いはかることができないものであること明かす。

その後に、大涅槃の徳について、第一に涅槃に至る実践のはたらきを示し、次に、大涅槃の徳「大楽」について、涅槃の本性ともいえる世間的・相対的な苦楽を超え、又絶対の寂静を持つ。そして、真実の変わることのない安らぎをもち、金剛不壊無漏の体・煩悩の身でもない無常の身をもつものであると示す。又、大涅槃の性格「大浄」は、不浄な世界を長く断ちきり、煩悩の穢れがなく、身は常住で煩悩を離脱した無漏故に、純浄なものであることを明す。そこで、大涅槃の境地の如来を「諸仏如来煩悩不レ起、是名二涅槃一。所有智恵、於レ法无碍、是為二如来一。」「如来身心智恵、遍二満无量无辺阿僧祇土一、无レ所二障碍一、是名二虛空一。如来常住无レ有二変易一、名曰二実相一。」と、如来は煩悩おこらず、その智恵は碍げられず、このように無碍のはたらきをするものを如来という。その身心は智恵そのものであり、数限りなく遍満し、碍げられることはない。故に、如来は虛無の光明であり、如来は常住で変易しないから、実相といわれることは、如来すなわち涅槃は、常・楽・浄であって有為の法ではないことを示す。実相とは真如実相の理そのものの身ということで法性法身を示している。故に、真仏真土が衆生の観念を超えた、さとりの境地として真理・滅度の境界を明かされている。『涅槃経』の引文は、如来・光明・仏性の真理性を示すものである。

そこで、親鸞は『涅槃経』の引文のあと、『浄土論』を引文し、「世尊我一仏　帰命尽十法　无碍光如来　願レ生二安楽園一観二彼世界相一　勝二過三界道一　究竟如二虛空一　広大无二辺際一」と述べ、尽十法無碍光如来の真仏としての徳をあらわされ、真仏土が三界の道に勝過し、究竟して虛空の如く、広大にして辺際なき世界を示されている。このことは『涅槃経』に一貫する仏性の真理性を明していると考える。故に、光明

の仏土を示す活動的大悲が如来・仏性であり、願生のはたらきをなすのである。

(二)

次に親鸞は曇鸞の『浄土論註』の清浄功徳の文を引かれ、浄土が迷いの三界を超え、すぐれた清浄な世界である。煩悩成就の凡夫も、この浄土に生まれると、煩悩はたちきえて涅槃のさとりを開くことができることを示されている。その後、性功徳の文を引かれ、(一)本の義 (二)積習の義 (三)聖種性の義 (四)必然・不改の義を示して、浄土の本質を示される。「法性に随順して法本にそむかず」という本の義を根底とした法蔵菩薩の発心と修行、それによって実現された安楽浄土について、「正道大道大慈悲出世善根生者、平等大道也。平等道所以名為正道者、平等是諸法体相。以諸法平等故発心等、発心等故道等、道等故大慈悲等。大慈悲是仏道正因故、言正道大慈悲。」と「正道の大道大慈悲」は大道としてはたらく大悲を示す。「安楽浄土」はこの大悲より生ずるが故に、この大悲を「浄土の善根」であると、浄土の本質において衆生の摂化活動をしている大悲を根本とすることを明かしている。故に、「浄土の善根」とは、仏道の正因なる大慈悲で、浄土の本質であることを親鸞は解していたと考える。又、性功徳に示された大悲・発願・修行・浄土建立の全体が、如来無縁の大悲と活動である。「性」とは根本という意味を持つ。その根本というのは浄土であり、その浄土は真如法性の理にかない、その理に随って成就されたものである。故に、浄土・如来の無縁の大悲は、法の根本を示したもので、その活動が仏性である。「真仏土巻」の浄土の性功徳は、仏性の功徳と考えることができ、真理の根源の仏性が大慈悲であることを明し、浄土の真理観を示される。

又、『浄土論註』最後の引文に不虚作住持功徳が引かれ、「願以って力成ず、力以って願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願相符して、畢竟して差はず、故に成就と曰ふ。」と、因なる願と、果なる力との「相符」の事実として、「力願相符」を示し、法蔵菩薩の願・行が成就し、浄土が建立されていることを明している。このことは、浄土を荘厳することに連なっていることと考えられる。親鸞は「真仏土巻」を説くに、真仏土は阿弥陀仏の清浄報土であると規定し、仏は不可思議光如来、土は無量光明土と示し、両者は共に光明として身土不二である。そして、この光明土こそ、真如・解脱・大涅槃そのものである。阿弥陀如来は如（真理）より来生したものとして、真如のはたらきである。このはたらきは衆生を対象としている。故に、阿弥陀如来のはたらきは衆生を浄土願生せしむるはたらきで衆生に立ちむかうものである。そこに、阿弥陀如来の本願力に遇うて空しくすぐるものはな

いというはたらきがはたらくのである。そこに、浄土建立の意味を示される。

次に『讃阿弥陀仏偈』を引文し、真仏土の意味を十二光によってしめし、阿弥陀如来を讃嘆する。ここで、最初の無量光について「智恵の光明量るべからず」と光明を智恵と示し、無辺光、無対光については「光触と蒙るもの有無を離る」「この光に遇りもの業繋除こる」といい、光明の慈悲の面について述べている。又、智恵光については「仏光能く無明の闇を破す」と示され、無明の闇に対する智恵の光明ということが示される。親鸞においては、光と闇の関係が最も顕著にみることができる。故に、仏身については特に、徳の光明としての真理性・絶対性を明されていると考える。

次に、善導の『観経疏』「玄義分」を引文するに、これは曇鸞の願力成就と関連しての本願力の内容を説明して、善導は「因願酬報」を述べる。又、ここにおいて「是報非化」を論ずるのである。

「法蔵比丘在二世王饒仏所一、行二菩薩道一時、発二四十八願一、一願言、若我得レ仏、十方衆生、称二我名号一、願レ生我国一、下至二十念一、若不レ生者、不レ取二正覚一。今既成仏、即是酬因之身也。」と、法蔵菩薩が世饒王仏のもとで願を立て阿弥陀仏となられた。その願を酬因した身であることを示し、願行の因に報われた仏としての報身仏であることを明す。

㈢

これらのことについて親鸞は、『唯信鈔文意』に、「極楽無為涅槃界」といふは、「極楽」と申すはかの安楽浄土なり、よろづのたのしみつねにしてくるしみまじはらざるなり…（中略）…誓願の業因に報ひたまへるゆえに報身如来と申すなり。報と申すはたねにむくひたるなり。この報身より応・化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無碍の智恵光を放たしめたまふゆえに尽十方無碍光仏と申すひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず。無明の闇をはらひ、悪業にさへられず、このゆえに無碍光と申すなり、無碍はさはりなしと申す。しかれば阿弥陀仏は光明なり、光明は智恵のかたちなりとしるべし。」と、極楽としての仏土を述べ、それが涅槃界、すなわちさとりの境界であることを明らかにし、その涅槃が仏性であるとして、そこから方便法身たる尽十方無碍光如来があらわれるという。その如来は智恵の光であっても色も形もないと明かしている。色も形もない法性法身の真如から形をあらわして方便法身の姿を示し、衆生済度の誓願を成就して報身となり、さらに多くの応化身をあらわして十方世界に光明をはなたれるが無碍光如来であるから、無碍光如来は智恵の光明にほかならないというのである。故に、真仏も真土もあらゆる観念を超えている光明にほかならない

といえる。これは我々が経験する光ではない。故に、「超日月光」ともいわれ、光明が真如・実相をあらわすものであるから、衆生の無明の中に如来の智恵光がとどいたならば、一如・真如・仏性が明らかになるはたらきを示すものである。このことを考えると、浄土・真土は、真理の根源をあらわすものである。

故に、親鸞は御自釈に「如来真説、宗師釈義明知、顕二安養浄刹真報土一、或染衆生、於レ此不レ能レ見レ性、所レ覆二煩悩一故、『経』言四「我説三十往菩薩少分見二仏性一。」故知到二安楽仏国、即必顕二仏性一。由二本願力回向一故。『経』言下「衆生未来具二足荘厳清浄之身一、而得レ見二仏性一。」と、真土の意味を結すばれ、真実の報土であることを顕し、その真土にいたってはじめて仏性を開くことを示し、さらに、「夫按レ報者、由二如来願海一酬二報果成土一、故曰レ報也。然就二願海一、有レ真有レ仮。是以復就二仏土一有レ真有レ仮。由二選択本願之正因一、成二就真仏土一。…（略）」と、浄土が阿弥陀如来の因位に、法蔵菩薩の願が成就して、その願に酬報し、その結果できあがった浄土であるから、報土であることを示す。しかし、弥陀の願の中にも、真実の願と権仮方便の願があり、浄土にも真の浄土と仮の浄土がある。このことは、真土が大慈の第十八願によって酬報されたものであることを示し、化土もまた大悲の第十九願・第二十願に酬報して建立された土であることを示す。だから、化土もまた報仏土であることは明らかで、従って真仏土も化仏土も共に報仏土であることには変りはない。故に、第十九願・第二十願・第十八願の生因三願は密接に関連している。このことは我々が如来の広大な恩徳を分からずに送ってしまい、自力心に迷う身である。そこで、如来の深き慈悲を示すもので、真仮が分かれば、本当の如来の慈悲が如何に深いかを示される。故に、報土に真土と化土が示されているのは、真実・真理を示さんとする。

以上、真仏土巻を中心に宗教的真理ということで考察して来たのであるが、親鸞は『大経』『涅槃経』『浄土論』『浄土論註』等を引文され、不可思議光如来・無量光明土を相対的な感覚や実体的なうけとめ形ではなく、涅槃界を明す。仏身仏土を無辺・無相・無量と解釈し、その仏身仏土は分かつものではないことを明されている。その真仏土が衆生済度の為の根源であることを光明によって明される。その背景には、如来の願心は流転せる衆生を浄土へ往生させるものであり、その浄土往生の本質を明かさせたものである。

〈キーワード〉 真理、仏性、涅槃、真仏土

（九州情報大学講師）